体験授業フェア

全36講座に高校生ら1201人参加

▲「英語発音の問題と解決法」＝フリックマン，ジェフリーC．文学部准教授

▲「男性と女性の経済学」＝飯沼健子経済学部准教授

6月22日、生田キャンパスで「体験授業フェア」が行われ、全36講座に高校生ら延べ1201人が参加した。入学センター学生スタッフが受付や案内を担当し、在学生相談コーナーで受験生からの質問に答えた。

▲「源氏物語千年紀への誘い」＝小山利彦文学部教授

▲「身近なトラブルに役立つ民法の基礎知識」＝須加憲子法学部准教授

入学センター学生スタッフによる キャンパスツアー

12月までの毎月2回、生田キャンパスで行われている＝写真。ツアーのプランニングから運営まで在学生が担当。スタッフお勧めのスポットを案内するほか、学生生活のコツや授業の受け方など、ナマの専大情報を提供する。8月以降の日程は次の通り。

▽8月9、23日▽9月13、27日▽10月11、25日▽11月8、22日▽12月6、13日

問・申入学センターインフォメーション

【神田】☎03・3265・6677

【生田】☎044・911・0794

オープンキャンパス情報

☆7月20日（日）【神田】

☆8月2日（土）【生田】

☆9月21日（日）【生田】

両日とも11時～15時で、全学部・学科・専攻が対象。問い合わせは入学センターインフォメーションまで。

活発に高大連携

神奈川総合高に講師派遣

「連携科目」授業内で特別講義

県立神奈川総合高校からの依頼により、本学教員が「連携科目」の授業内で特別講義を行う取り組みが始まった。

6月14日は、片桐一彦文学部准教授が、「ラピッドリーディング」で、「速読のためには多読が必要」であると説き、アメリカABCニュースを教材に実習を行った＝写真。同21日は、貫成人文学部教授が「現代哲学入門」を講義。11月には狐崎知己経済学部教授が「グローバル学習」「スペイン語Ⅱ」の講義を行う予定となっている。

狛江高3年生330人本学訪問

海老名高PTAの約40人も見学

キャリア教育の一環として、都立狛江高校の3年生全員約330人が5月から6月にかけ4回に分かれて、本学を訪れ模擬授業や施設見学で進路選択の参考とした。（写真上＝6月18日の佐藤文雄商学部教授の模擬授業「現代の企業と会計」）

6月18日には、県立海老名高校PTAの約40人も本学を訪れた。荒木敏夫副学長及び同校の評議員である吉田雅明経済学部教授のあいさつや、大学紹介ビデオ鑑賞、学生の引率でのキャンパス見学などで、「現在の大学像」に理解を深めた＝写真下。

専大松戸高1年生381人来学

荒木副学長の講演聞く

6月7日、専修大学松戸高校の1年生381人が生田キャンパスを訪れ、荒木敏夫副学長の講演「大学で学ぶ日本の古代―聖徳太子とその時代―」を聞いた＝写真。

その後、生徒たちは、学生の引率でキャンパス内を見学し、大学の雰囲気を体感した。

1年次生迎え交流合宿

文学部心理学科と人文・社会学専攻

「よこ」と「たて」のつながりを強く

心理学科

▲伊勢原セミナーハウスの前で

「たくさんの友達ができた」「友達と夜通しいろいろな話ができた」「先生方と面識を持てた」……。

4月19、20の両日、伊勢原セミナーハウスで開催された文学部心理学科フレッシュマンキャンプには、1年次生ら学生70人、下斗米淳学科長はじめ心理学科の全教員が参加した。学科内のコミュニケーションが深まり、開催後に行ったアンケート調査では〝合宿〟の充実した様子をうかがわせる感想が多く寄せられた。

同キャンプは昨春、新入生のしんぼくの場として初めて開催し、好評だったことから今年は心理学科の公式行事として開催。参加者はクイズやゲームでリラックスしたあと立食パーティーで和やかに交流。そのまま時間を忘れての交歓が続いた。

キャンプを進行する上で重要な役割を担ったのが、上級生で組織された実行委員会。17人のメンバーは、キャンプの事前準備から企画、進行、運営などを取り仕切った。実行委員長を務めた石塚恵美さん（4年次）は「夜遅くまで語り合っていた1年次生を見て、結束が強くなったと思う。私たちも1年次生との面識ができたので有意義だった」とキャンプを振り返った。

▲クイズやゲームで盛り上がる

心理学科は、1学年あたり教員1人に対して学生5人という少人数教育により「顔の見える教育」を持ち味とする。教員側の世話人の一人、澤幸祐准教授は「今後の学習効果を上げるためには、新入生同士の『よこ』のつながり、新入生と上級生・教員との『たて』のつながりを強くしていくことが不可欠。今回の合宿で距離感がぐっと縮まった」と語っている。

駅周辺を実地調査し基本を学ぶ

社会学専攻

▲商店の人にインタビューする豪徳寺グループ（大矢根淳ゼミ）

文学部人文学科社会学専攻の全1年次生が参加する「基礎ゼミナール合同セミナー」が5月17、18の両日行われた。調査の企画、実地調査（インタビューなど）、分析、発表という社会学の研究手法の一つである社会調査を体験するもので、1年次生恒例の合宿だ。

今回の調査は、小田急線沿線の「駅」にスポットをあてた。1年次生110人が所属基礎ゼミの11グループに分かれ、まちの産業や歴史、地域コミュニティー、人々の生活などを切り口にしたテーマに沿って〝現場〟調査。まちを歩き、インタビューやアンケートを行った。その後、伊勢原セミナーハウスでレポートにまとめ、発表会が展開された。

ニュータウン都市としての特徴を探った「多摩センターグループ」、まちのシンボル・招き猫が商店街の活性化にどのように貢献しているかを追った「豪徳寺グループ」、治安面で危険なところと言われて久しい町田駅周辺。しかし本当に危ない場所なのか、住民や乗降客から聞いた「町田グループ」など個性的な発表が相次いだ。

▲新百合ヶ丘グループ（宇都榮子ゼミ）の発表

合宿には2年次生以上の先輩学生や大学院生12人も参加しこれまでの経験を生かして後輩にアドバイス。嶋根克己教授は「今年は全グループがパワーポイントを使って発表。上級生たちはその使い方のレクチャーにも活躍してくれた」と学生相互のコミュニケーションが深まったと強調。

大矢根淳教授は「〝取材〟に慣れず相手から答えが得られずに四苦八苦した学生もいたようだ。社会調査の難しさ、グループ作業の大切さを実感したと思う。何よりも『社会学的意識を持って物事に当たる』ための基礎が得られたのではないか」と合宿の成果を語った。